

カンティロンにおける内在価値
——経済環境および価値尺度の表現——

金子 創*

報告要旨

I 問題の背景

本研究では、リチャード・カンティロン (Richard Cantillon, c. 1680/1690-1734) における「内在価値」 (intrinsic value; valeur intrinsèque) の定義およびその背後で想定される経済環境について検討する。

古典派あるいはそれ以前の経済学説を論じる上で、それぞれの価値概念の取り扱いがしばしば経済学史上の重要な問題としてとらえられてきた。各学説が何らかの経済現象を記述する場合に、その記述は価値概念に基礎づけられていると考えられる。したがって、諸学説を理解する上で、それぞれの価値概念の解釈は一定の役割を果たすと言える。しかし、多くの価値概念は合理的に解釈し難い記述を含み、それゆえにいくつかの価値理論の構成として理解される。たとえば Schumpeter (1954, 590-591/訳 (中) 396) は、アダム・スミスの価値概念に関して、3つの価値理論、すなわち (i) 労働数量説——ある商品に「体化 (embody) された労働量」——、(ii) 労働非効用説——ある商品が市場で「支配 (command) する他の主体の「労苦と骨折り」 (toil and trouble) の量——、(iii) 生産費説——ある商品の生産に投入される生産要素の費用——、の混在を指摘し、さらに労働の価値尺度財としての望ましい性質についての記述との区別の必要性も強調した。また Hollander (1987, 61-64/訳 73-77) はスミスの体系を論じる上で、商品に「体化された労働量」によって規制される長期価格の決定問題と国民所得および個人所得の指標としての「労苦と骨折り」という価値尺度問題を区別した。こうした研究は価格決定体系としてスミス体系の解釈を主な目的としており、価値尺度財としての労働はその体系 (的解釈) において本質的な意味をもたない。これに関連し、商品に体化された労働と商品が支配する労働の混同という点に関するリカードウのスミスに対する批判が強調され、スミス以降の価格決定についての体系的発展を系譜として表すことに一定の妥当性が付与される。

対して古典派以前の学説を、そうした系譜を前提として論じることにはいくつかの理由から慎重でなければならない。まず多くの学説の価値概念はスミスほどにも明示的に記述されておらず、そもそも価格決定体系として解釈することの妥当性が明らかではない。また (価格決定体系と解釈できたとして) 長期価格決定のプロセスの評価には、たとえばスミスの想定した競争的な市場構造を保証する条件¹ (に相当するような社会状態についての

* 慶應義塾大学 大学院 経済学研究科 後期博士課程

¹ たとえば Hollander (1987, 64/訳 77) によれば、スミスにとっての条件は「参加者が多

記述)を伴うが、その点についての記述が明確でないケースも少なくない。そこで価値概念の定義およびその価値概念が定義されるためのもっともらしい経済環境の想定についての解釈が要請される。

カンティロンは、小著『商業一般の本性に関する試論』 (*Essai sur la Nature du Commerce en Général*, 1755) (以下、『試論』)において内在価値という用語を特徴的に定義しており、本研究では上述の要請にしたがって内在価値を解釈する。カンティロンの内在価値の定義は、第一義的には「生産に入りこむ土地と労働の大きさ」 (*Essai*, 17/訳 20) であり、それはある財の価値が二つの異なる量の組によって表示されることを意味する。そこで「土地と労働の価値の平価 (pair)」と呼ばれる関係によって、労働の量を土地の量に換算、価値の土地の量による表示を可能としている。標準的解釈²によれば内在価値は費用不変の条件を導出するための仮定を伴う生産費説 (cf. Hollander, 1987, 29/訳 37) とされ、平価は与えられた (適当な) 技術および実物賃金のもとで定まる単位産出量当たりの労働必要量の土地必要量に対する一定の関係と理解される。しかし平価に関する記述の不明瞭さ³に起因して、その価値の具体的な計算手続きも不明瞭⁴であり、またその財の実際の取引価格との関連も明らかではない。先行研究においても、それらの点がしばしば指摘されてきた。

II 諸解釈および問題

Brewer (1988; 1992, chap. 5) は内在価値の標準的解釈に応じた価値決定体系の形式を提示している。ただし、これらは土地を唯一の本源的生産要素とし1単位当たりの地代が同一であるような同質的な土地を前提としており、また資本⁵ (capital) (および対応する利潤 (profit)) を含まない生産体系における価値の表現であり、それらの点はしばしば生産要素の同質性に関する解釈上の問題として指摘される⁶。以下ではそうした指摘を2つに

数であることと共謀が存在しないこと」である。

² Thornton (2007) によれば Aspromourgos (1989; 1996); Brewer (1988; 1992); Brems (1978) などが該当する。

³ Aspromourgos (1989, 365; 1996, 81, 98) などによれば、一般に生産費は価格情報から独立に知られることはなく、もし内在価値の体系が生産費説として解釈されとしても平価によってはそうした循環論法は避けられない。

⁴ Thornton (2007) に強調されるように、『試論』第2部において「…さまざまな物産や商品の運送が生みだす困難について述べることによって、物産とか商品とかの内在価値を個々に規定することが不可能」 (*Essai*, 65/訳 77) であると述べられている。したがって内在価値の明確化それ自体をカンティロン自身の意図の反映と見なすことはできない。しかし、本研究の興味は、カンティロンが試みている経済現象の説明における内在価値の有用性という点にある。それは内在価値の明確化を通じて議論される。

⁵ 本研究では古典派的な意味、すなわち賃金の前払いのための基金とする (cf. 佐藤, 2000)。

⁶ 内在価値の形式的な表現として他に Brems (1978; 1983) が知られるが、これは土地だけでなく労働の同質性をも仮定しており、以下で述べられる問題がより深刻につきまとうと考えられる。

分類し整理する。

第1に土地の同質性の仮定と、それに伴う尺度の問題である。まずカンティロンの異質な土地を取り扱った記述との整合性という意味で、その仮定は問題を含んでいる。事実、Brewer (1988, 279; 1992, 68-70) は土地の同質性を価値決定の形式における必要な仮定と位置づけることで異質性に関する記述をカンティロンの価値体系の欠陥としている。しかし Grieve (1993, 49-50) によれば、それは本質的に互いに異質な土地を集約する単位を内在価値の計算手続きに先行して必要としているのであって⁷、カンティロン体系の妥当性に作用しているかについては必ずしも明らかではない。そこで異質な土地を許容するカンティロンの体系についての解釈が要請される。

第2に労働と実物賃金の対応についての解釈である。標準的解釈のもとでは、互いに異質な労働にそれぞれに賃金が対応しており、各労働あるいは賃金に関するデータが与えられていることを意味する。それ自体はもっともらしいとしても、その労働の種類に関するカンティロンの記述との整合性については議論の余地が残る。カンティロンは「企業者」を所得の不確定な主体と定義しており (*Essai*, 第1部第13章)、また高級労働を意味する借地農や親方職人⁸を企業者とみなしている (*Essai*, 第1部第11章)。そこで借地農や親方職人の労働と所得(賃金)の関係が解釈上の問題として生じる。また『試論』第2部においてはしばしば借地農の資本投入を示唆する記述が散見されるが、上で見たように標準的解釈のもとでは資本および利潤は除外される⁹。もし第2部におけるそうした記述においても価値体系が何らかの意味で維持される¹⁰のであれば、その場合に借地農の労働と資本の経営の関係が別の問題として生じる¹¹。それらの問題は与えられているデータにおける各労働および賃金の評価方法において関連する。したがって、『試論』における互いに異質な労働およびそれぞれの賃金の根拠に関する記述についての解釈が求められる。

本研究では以上の2つの問題を通じて、カンティロンの内在価値およびその前件となる

⁷ 実際、Brewer 解釈では賃金を表示する穀物単位がその役割を負っており、穀物の生産技術および価値表現のために土地の同質性が必要とされている。

⁸ 「高級労働」は米田 (2005) の用語法による。カンティロンは、隷農や奴隷職人、自由な農夫などを含む「単純労働」に対して、それらを監督する特殊な労働を想定している。

⁹ カンティロンにおける資本および利潤の取り扱いの可能性については、たとえば Prendergast (1991) を参照されたい。一方で Aspromourgos (1996, 116-119) は、資本に含まれる2つの概念、すなわち、土地や労働とは異なる生産手段としての資本およびその所有者に賃金や地代とは異なる利潤をもたらす手段としての資本、の区別に注意しており、カンティロンの認識を前者に限っている。その根拠の1つにカンティロンの価値概念からは資本に対応する利潤概念が確認されないことが挙げられている。しかし、そうだとすれば『試論』第2部における記述に対するカンティロンの価値体系の一貫性が問題になる。

¹⁰ Prendergast (1991) は主に第2部における資本および利潤の対応を解釈しているが、第1部と第2部の一貫性については議論していない。

¹¹ Brewer (1992, 63) によれば、資本はそれを経営する(一部の)企業者的労働の費用の一部となる。それは、カンティロンにおける資本経営を各労働の相対賃金の特徴づけとして理解することを意味する。

経済環境について検討する。

III 再解釈

第1の土地の同質性に関する仮定は、上で見たようにそれらを集約する先行的な単位の必要性を意味していると示唆される。もしそうであるならば、単位を適当に選ぶことで異質な土地の考慮が可能になると考えられる。そこで、以下ではその代替的な可能性¹²⁾について考える。

ある基準となる財（たとえば穀物）を選び、その生産過程において投入された労働に対して「生活様式」（mode of living; mode de vivre）にしたがって賃金が与えられるものとし残余を地代とする（それぞれ実物単位で分配されているとする）¹³⁾。その生産過程において投入されている土地量と地代の関係が定まるのであるから、（土地量÷地代）によって単位当たりの土地量が表される¹⁴⁾。したがって、それを賃金に乗じれば賃金も土地量によって表され、その和が内在価値となる。他の生産過程においても（土地の異質性や生産技術とは無関係に）地代が与えられた賃金の残余として定まっているのであれば、同様にその生産過程における内在価値の表現が可能になり、その限りでの財の相対価値が定まることになる。

こうした手続きは生活様式にしたがった財の分配ルールが前提とされており、それはカンティロンの記述にしたがえば地主による（*Essai*, 第1部第14章）。もしそうであるならば、（地主主導の経済を考える限りは）賃金は地主によって決められていることを意味する。そこで第2の問題、すなわち労働と実物賃金の対応について解釈が関連する。

ある地主主導経済においては地主が実物賃金を決めているのであるから、その場合に労働の異質性を与えるのも地主である。しかし、第2部における資本が生産過程に導入されたケースでは異なる分配ルールが想定されている可能性が示唆される。なぜなら、カンティロンは資本の貸手となる主体と共に新たな分配をも導入¹⁵⁾しており、「3つの地代」¹⁶⁾とし

¹²⁾ 基本的には Grieve (1993, 50) の解釈による。ただし、Grieve (1993, 51-52) は、その場合に何らかの配分を前提にしているために、その点に対しては内在価値を説明的であるというよりも描写的であると解釈している。

¹³⁾ この解釈のもとでは、この賃金と地代の比率が直接的に平価を意味する。

¹⁴⁾ この生産過程だけを問題にするのであれば改めて土地を価値尺度財とすることには、手続き上カンティロンの記述と対応させることができるという以上の本質的な意味はない。しかし、他の生産過程との相対価値を定めるために必要となる。

¹⁵⁾ 「…1人のやり手の農夫がいるとして、彼は自分の賃仕事でその日その日を暮らしているので、資本というものを全く持っていないのだが、その彼が誰か自分に土地か、あるいは土地を買うための貨幣を貸してくれるという人を見つけることができるとするならば、…彼がその借地農あるいは企業者となる農場の生産物の3分の1を、この貸手に与えることができるだろう」（*Essai*, 112/訳 130）。

¹⁶⁾ 「借地農は3つの地代を生みださねばならないというのが、イングランドでの普通の考えである。すなわち、1、彼が地主に支払う主要な、そして本当の地代であり、これは彼の農場の生産物の3分の1の価格に等しいと考えられる。第2の地代は彼自身の生計の維持

て知られる記述を展開するからである。この場合は、たとえば資本の貸手が実物賃金をおよび貸付資本に対する報酬を与えているとすれば、同様の内在価値の計算手続きを構成することが可能であると考えられる。しかし、その場合に地主主導経済と同様に内在価値の水準が定まっているとは限らない。

IV 長期価格

以上をカンティロンにおける内在価値と見なした場合に、それを長期価格としてはどのような意味を持つであろうか。既に述べたように長期価格を論じる場合には社会状態についての何らかの表現と対応させて評価する必要がある。今、本研究における内在価値を長期価格と見なすのであれば、平価を価値尺度およびそれに対応する経済環境の表現に関する問題として再検討しなければならない。カンティロンによれば「この平価は労働に従事する人々に割り当てられる土地の生産物がどれくらい多いか少ないかによって、さまざまな国で異なる」 (*Essai*, 24/訳 29) のである。上で見たように平価は生活様式によって与えられる賃金と地代の比率を意味しており、それはたとえばある社会では地主の主導の分配を意味する。もし地主が需要を変化させるのであれば、それに応じた分配ルールの変更が起こり対応して平価も与えられる。その意味で、長期価格としての内在価値は（地主主導の社会において）地主が需要を変えない限りにおいて一定であると考えられる。またカンティロンは必ずしも地主主導経済だけではなく、資本の貸手が存在する経済も記述している。その場合にも擬似的な分配ルールを想定することで同様の価値体系が維持されていると解釈できる。

カンティロンの内在価値概念は、経済環境が異なるのに対応して分配ルールが与えられ、それにもとづいて価値尺度も選択されている。もし経済環境が異なるごとに市場構造も異なるとして、またカンティロンの価値決定の体系（的解釈）において価値尺度の選択に関する議論だけがその対応関係を表すパラメータになっているとすれば、それは何らかの意味で価値尺度の選択がカンティロン体系において本質的である可能性が示唆される。

参考文献

- Aspromourgos, T. 1989. The Theory of Production and Distribution in Cantillon's *Essai*. *Oxford Economic Papers*, 41. 2: 356-373.
- . 1996. *On the Origins of Classical Economics: Distribution and Value from William Petty to Adam Smith*. New York: Routledge.
- Brems, H. 1978. Cantillon versus Marx: the land theory and the labor theory of value. *History of Political Economy*. 10. 4: 669-678.

と、彼の農場の耕作に使っている人間と馬の維持とのためのものである。そして最後に、第3の地代は彼の手もとに残って、彼の企業に利潤をあげさせるために用いられるべきものである」 (*Essai*, 69/訳 81)。

- . 1983. *Pioneering Economic Theory, 1630-1980: A Mathematical Restatement*. Baltimore: Johns Hopkins Press.
- Brewer, A. 1988. Cantillon and the Land Theory of Value. *History of Political Economy*, 20. 3: 447-460; reprinted in M. Blaug, ed. 1991. *Richard Cantillon (1680-1734) and Jacques Turgot (1727-1781)*. Brookfield, Vermont: Edward Elgar.
- . 1992. *Richard Cantillon: Pioneer of Economic Theory*. New York: Routledge.
- Cantillon, R. 1755. *Essai sur la Nature du Commerce en Général: Traduit de l'anglais*. Londres: Chez Fletcher Gyles; reprinted in L'institut National D'Études Démographiques. ed. 1952. *Texte de l'édition originale de 1755*. Paris: 1-175. [Essai]. 津田内匠訳「商業一般の本性に関する試論」『商業試論』所収, 名古屋大学出版会, 1992: vii-xii, 3-211.
- Grieve, R. H. 1993. A Course between Scylla and Charybdis?: Cantillon's Theory of Distribution and Value. *Journal of Economic Studies*. 20. 6: 44-56.
- Hicks, J. 1983. The Social Accounting of Classical Models. In J. Hicks. 1983. *Classics and moderns: Collected Essays on Economic Theory*, vol. 3. Oxford: Basil Blackwell: 17-31.
- Hollander, S. 1987. *Classical Economics*. Oxford: Basil Blackwell. 千賀重義・服部正治・渡会勝義訳『古典派経済学——スミス, リカードウ, ミル, マルクス——』多賀出版, 1991.
- Prendergast, R. 1991. Cantillon and the Emergence of Theory of Profit. *History of Political Economy*, 23. 3: 419-429.
- Schumpeter, J. A. 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史 (中)』岩波書店, 2006.
- Thornton, M. 2007. Richard Cantillon and the Discovery of Opportunity Cost. *History of Political Economy*, 39. 1: 97-119.
- 佐藤有史 2000. 「賃金論」『経済思想史辞典』丸善, 所収: 253.
- 米田昇平 2005. 『欲求と秩序—18世紀フランス経済学の展開』昭和堂.